

はじめに

本書には三人の主人公がいる。

それは、筑紫哲也、原田啓介、渋谷正芳の三人だ。

とりわけ大役を担ってもらう筑紫は、一九三五（昭和一〇）年に大分県日田郡小野村（現日田市）で生まれ、二〇〇八（平成二〇）年に没したジャーナリストだ。早稲田大学を卒業し朝日新聞社に入ると、政治部記者やワシントン特派員、雑誌『朝日ジャーナル』編集長として腕を鳴らし、一九八九（平成元）年からTBSに請われ『筑紫哲也NEWS23』のメインキャスターとなる。平日夜に全国放送されたニュース番組の顔を二〇年近く務めた往時の筑紫には、「ほとんどの日本人が知っている」と言い切れる知名度があった。

原田は一九五八（昭和二三）年、筑紫と同じ日田市で生まれる。高校卒業後、京都でのフリーター生活などを経て、五二歳から三期一二年にわたり日田市長を務めた。

渋谷は日田市に隣接する大分県山国町やまくにまち（現大分県中津市山国町）で一九七〇（昭和四五）



原田啓介さん



渋谷正芳さん (いずれも筆者撮影)

年に生まれた。町職員として働いていた郷里の山国町は二〇〇五（平成一七）年の「平成の大合併」で中津市に編入され、以後は中津市職員として農業政策や観光振興に尽力する。

筑紫と原田の年齢はおよそふた回り、原田と渋谷はひと回り離れている。年齢も経歴も知名度も異なる三人の人生は、ある一本の糸で結ばれていた。

それは、「自由の森大学」。

一九九四（平成六）年から二〇〇六（平成一八）年まで、日田市で毎月開かれていた市民大学だ。

日田出身の筑紫は、発案者の原田ら故郷の若者たちの求めに応じてその学長を務める。原田は初代の実行委員会委員長で、渋谷は最後の実行委員長だった。

新聞、雑誌、テレビとメディアを横断して活躍した筑紫は顔が広がった。その筑紫に口説かれた数多くの著名人が、九州のへそに位置する日田に足を延ばす。

宮本亞門、立松和平、椎名誠^{しいな}、阿川佐和子、岩國哲人^{てつんど}、三枝成彰^{しげあき}、倉本聰、平山郁夫、

加藤登紀子、立花隆、永六輔、小沢昭一、山田洋次、ドナルド・キーン、五木寛之、岸田

今日子、林真理子、宮崎駿^{はやお}、美輪明宏、谷川俊太郎、石井竜也^{たつや}、吉永小百合、養老孟司^{たけし}、

野村萬斎、安藤忠雄、立川談志^{たてかわ}、内橋克人^{かつと}、森毅^{つよし}、佐木隆三、糸井重里、瀬戸内寂聴、

中村哲、村田喜代子、日比野克彦、中村勘九郎（五代目）、森永卓郎、櫻井よしこ――。

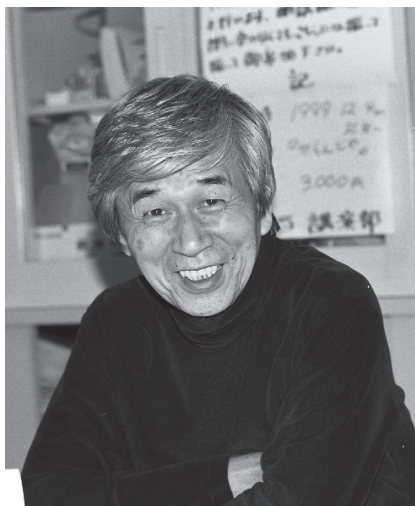
豪華で多彩な講師陣に引き寄せられるように、受講生は一二年の開講期間で延べ約一万五八〇〇人を数えた。

彼らの試みによって、バブル経済崩壊直後の小さな地方都市に、一時、ある種の文化的な営みが確かに植えつけられた。

しかし、現在。

九州の地理的な中心にあるのにもかかわらず、日田は、きつと東北の、北陸の、四国の、いや、全国のほとんどの地方都市と同じように、あえいでいる。

止まらない少子高齢化、低迷し続ける地元経済――。



自由の森大学事務所で笑顔の筑紫哲也さん(提供写真)

それは、日田の中心部から離れた旧郡部ほど著しい。行政の屋台骨は軋^{きし}み、間もなく地域を支えられなくなるかもしれない。

その予兆は、自由の森大学発足時からあった。筑紫をはじめ実行委員たちは、岐路に立つ地方の行く末を心から案じて議論を重ねた。

私は、福岡市に本社を構える西日本新聞社の記者として二〇二二（令和四）年一月、西日三）年八月から丸二年間、日田支局に赴任した。そして二〇二二（令和四）年一月、西日本新聞大分県版に全一〇回の連載「ないならつくろう 筑紫哲也と自由の森大学」を執筆する。

当時の取材に、「文化によるまちおこし」を掲げた元メンバーたちの誰もが目を細めて

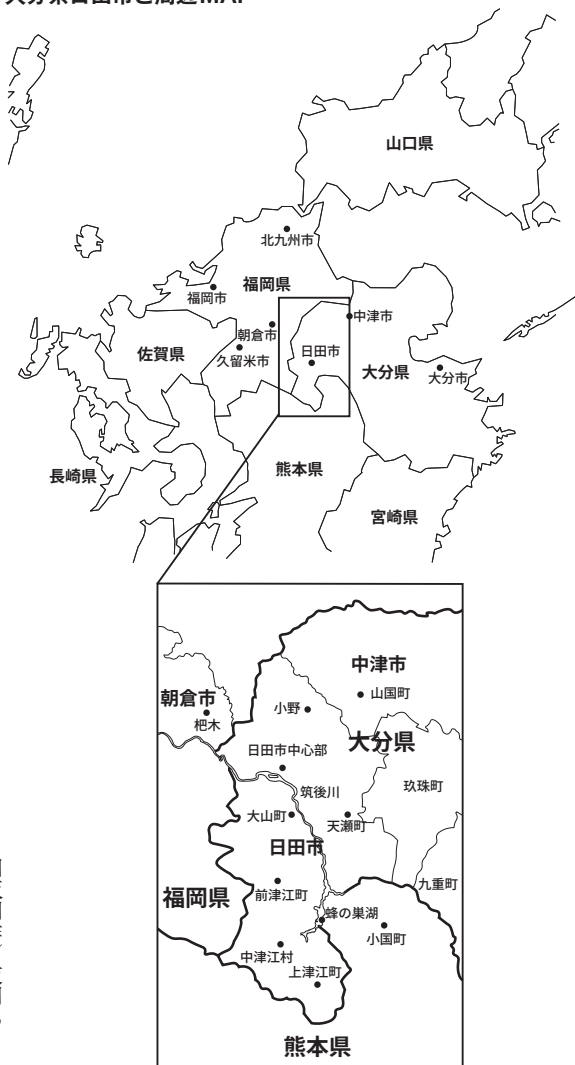
ありし日を振り返った。今回、書籍として書き下ろすにあたり、改めて多くの人たちを訪ねて回り、私なりに考えを巡らせた。

私は冒頭、「本書には三人の主人公がいる」と書いた。それは主に、筑紫、原田、渋谷という立場も年齢も大きく異なる三人に光を当て、自由の森大学というレンズを通して現在も続く地方の諸問題を考えたからだ。だがもちろん、本書は多くの魅力的な登場人物が活躍する群像劇でもある。

この本の刊行（二〇二六〓令和八年）までに自由の森大学の開講から三〇年あまりの時が流れた。それは、バブル経済崩壊後の、この国の「失われた三〇年」とほぼ重なる。人体に譬^{たと}えるなら指先や足先から壊死^{えし}していくように、地方から崩れていくこの国。

病魔^{むしは}に蝕^{むし}まれるばかりの地方で、彼らは三十余年前から、そしていまも、足掻^あき続けている。

大分県日田市と周辺MAP



目次

はじめに

第一章 「水郷」に生まれた市民大学

14

二〇二三年六月二三日／没後一五年の誕生パーティ／左利きの愛煙家／
賢くて優しい、ふくよかな少年／「こなした」同級生たち／
軍国少年の「転向」／風流人に誘われ／原稿料は小鹿田焼／初恋の恩師／
惚れたがる人／若者たち／そうだ、京都に行こう／市民大学？ ナンじゃいな／
むしろの誓い／市町村合併を見据えて／絵に描いたような好青年／
早稲田の赤本に「筑紫哲也」／あのとときの気持ちは……／語られない過去／
一家総出で支えた／ふたつの事件／私たちがいなければ、できてない／
自由ほど不自由なものはない

3

第二章 文化によるまちおこし

政治と宗教に関わらない／ムツゴロウさんも顧問に／

目指すは「平成の咸宜園」／くんちゃん／「連れション」の出会い／

亡き息子の分も出会えた／湯布院に泊まります／開講を飾った「時の人」／

吉永小百合がやってくる！／胸ポケットに歯ブラシ／一緒に写りませんか？／

生粋の戦後民主主義者／愛された元ディレクター／優柔不断か右顧左眄か／

政見放送に出演、停職三か月／TBSは死んだ／スタッフを鼓舞する遊び心／

君臨すれども統治せず／少数派の異論が許されない時代／福岡政行を使うな

第三章 まちおこしは家こわし

特別講座／日田と中央がリンク／中坊公平、菅直人——時代の寵児を招き／

サテライト日田／鳴りやまない受話器を……／美しい停滞／

捨てられない開発幻想／事務所は不夜城に／なんでこんなに頑張れるの？／

「多事争論」を実践していた／三行半／その上を行く自由人／本当に素敵な人／

第四章

平成の大合併

似た者師弟の絆／ないならつくろう／忘れ得ぬ宿泊客／
みんなを喜ばせようとしていない／ネクラがネアカに／シンガーになりたくて／
谷川俊太郎の「予言」／千年あかり

地方の時代／「生活の質」の充実を／近代国家Ⅱ中央集権国家／
聖域なき構造改革／合併への一本道／地方の鼻先にニンジン／合併は時期尚早／
合併反対派を巻き込み／合併のキーマン／先細る自治体を押しつける？／
あんたたちはクビじゃ／閉講／一〇期目で辞める——学長が翻意／
続けてくださいじゃない。あんたたちがやる／魅力が薄れた？／日常に帰る／
情熱だけでは持たない／尋常ならざる決意を抱き／地方の若者の抵抗運動／
日田市名誉市民に異論／何もありません。全会一致です／良き旅立ちを／
昆虫巡査／大分のすべてを知りたがった／愛憎半ばの故郷／危ない咳／
中津のスッポン／転移に次ぐ転移／『NEWS 23』のDNA／雨の千年あかり／
迷いのなかで／役場の仕事は上意下達？／安定した公務員から……／

「自分探し」の果てに／町役場は市役所支所に／繰り返される豪雨災害／
抗えない衰退／独立自尊／それぞれの道を

終章

筑紫哲也の亡き後も

津江／見渡す限りの山と杉／中津江ホール／山奥で過ごした豊かな時間／
地域で唯一の文化施設／四半世紀で人口半減／たったひとりの反乱／
寝耳に水の解体方針／地域課題を自ら解決／地域の「鼻つまみ者」に／
アイデアマンの施策／鎌倉時代から生きる一族／経営の師は堤清二／
山奥の暮らし、いいな／日韓W杯で脚光／
学校の統廃合、消防署出張所の廃止方針も／辺境には目を向けない／
「第二の敗戦」／風向きは変わるか／津江の土に還る／お前が責任を取れ／
日田市特有の問題意識／住民自治の可能性／災害市長／「自立」と「対話」／
文化は箱じゃない／二〇二三年七月九日

本文中の人物の敬称は、原則省略した。
資料の引用は原則として旧字体を新字体に改め、旧仮名遣いはママとした。